

平成 30 年 11 月 10 日

日本李登輝友の会秋田県支部設立総会・記念講演会記録

去る平成 30 年 11 月 10 日、秋田県支部の設立総会・記念講演会が開催された。記念講演講師には、秋田の熱心なファンから要望の強かった川村純彦・日本李登輝友の会副会長をお迎えした。

講演会前日の 11 月 9 日昼前に川村氏と仙台から合流された前仙台市長で台湾・中信金融管理学院教授の梅原克彦・日本李登輝友の会常務理事がお着きになり、日本李登輝友の会会員の舛谷政雄氏がお迎えした。

あいにくの小雨模様であったが、舛谷氏および秋田県にかほ市在住の会員土門礼子氏の案内で、明治 45 年日本人で初めて南極大陸に上陸したにかほ市出身の白瀬轟中尉を偲んで建立された白瀬南極記念館を訪ねられた。また白瀬中尉の眠る同市の浄蓮寺を墓参されたが、墓碑は岸信介元総理が揮毫し建立したもので、三角形の自然石は南極の氷山を表している。

11 月 10 日は午後 15 時から秋田市のパーティギャラリーイヤタカにて設立総会を行った。支部会員 14 名中 13 名が出席（委任状 1 名）、日本李登輝友の会本部から川村副会長、柚原正敬・常務理事兼事務局長にご参加頂いた。

まず設立発起人代表が設立の経緯と謝意を述べ、本会の事業への協力はもちろん、地方レベルでの日台交流で裾野を広げたいと挨拶した。

続いてご来賓の柚原常務理事から渡辺利夫会長のご祝辞のご披露と本会の活動内容の説明があり、本会の常務理事であり秋田県支部会員でもある梅原氏より李登輝元台湾総統よりのご祝辞の披露があった。

渡辺会長も李元総統も、台湾と故中嶋嶺雄・国際教養大学初代学長とのご縁に触れられ、中嶋先生ゆかりの秋田の地に支部が設立されることへの温かいお言葉をくださった。

梅原氏による趣意書の朗読の後、議事に入った。審議を経て、規約、役員人事、顧問、予算、事業計画が承認され、秋田県支部は 28 番目の支部として無事誕生した。

記念講演会は、秋田駅に直結する「アルヴェ」で 18 時 30 分から行われた。

遅い時間にも拘わらず 40 名が参加した。

会場には、李元総統が 2007 年奥の細道の旅で秋田を訪ねられた時に宿泊された夏瀬温泉「都わすれ」様からの見事な花が飾られ、開演までの間、李元総統と故中嶋嶺雄先生の秋田の旅のご様子のスライドが流れた。スライドのバックには台湾の多くの方に愛されている「望春風」の二胡の演奏と台湾の李登輝学校二期生たちが作った CD「帯翅種子 迎風飛翔」が流され、少し早く着いた参加者は興味深く見入っていた。

主催者の挨拶・謝辞の後、ここでも渡辺会長と李元総統のご祝辞の朗読があり、来賓の北林康司・秋田県議会議員より秋田と台湾の交流を深めるべく、志のある議員で秋田県台湾議連の設立を目指しているとお話があった。

その後、発起人であり、秋田県支部顧問である那波三郎右衛門氏から挨拶があった。同氏は中嶋嶺雄先生と小中高校の同窓で、中嶋先生と深い交友関係にあり、秋田に台湾関係の会を作ることの意義の大きさについて語られたが、感銘深い素晴らしいものであった。

18 時 50 分から川村副会長の基調講演は、海洋覇権国家へ拡張をつづける中国の脅威に晒されている日本と台湾にとって誠に時宜を得たものであった。

続いて川村、梅原、柚原の三氏による秋田と台湾の未来に進む道程につき鼎談があった。

以下に会に参加されていた秋田市在住の渡辺利之様より頂いた、講演の要録を掲載する。

1. 日本と台湾は運命共同体 ～日米同盟と台湾の安全保障協力こそ喫緊の課題
日本李登輝友の会副会長、NPO 法人岡崎研究所副理事、元海将補、元統幕学校副校長 川村純彦氏

中国の国力増大は、我が国にとって大きな脅威であり、その行動のベースは大陸国家であることに依拠している。その思想は、海洋国家たる我が国と相いれない部分が多い。且つ共産党の一党独裁政権であることは、秩序を打破することで自国のステータスを国際社会に知らしめようとする。その手段は、軍事力の強化と増強である。例えば、朝鮮戦争時の中国の行動がその一例である。

中国は人海戦術で米国を圧倒した。数の論理である。その後、中国はベトナムに攻め入った。ベトナムは米国との戦争直後であったことから旧ソ連の軍事的サポートを受けていたことを背景に強力であった。よって、中国は敗けている。その経験から中国は海洋進出戦略に転換を図り、1996年に台湾で李登輝が民意を受けて総統に就任した後に台湾海峡付近で大規模な軍事訓練を行い、ミサイルを発射して威嚇した。これに対して米国が軍艦を展開するに至り、その経験から更なる海軍力の増強に舵を切ることとなった。それに加えて大陸間弾道ミサイルの開発も行うことになる。こうした一連の行動は、米国を想定している訳で、祖国統一と海上主権の防衛がスローガン。前者は台湾を統一すること。現在の海軍力は原子力潜水艦や潜水艦、攻撃型原子力潜水艦が主力。これらは、レーダーでの探知が極めて困難な兵器である。中国が海洋に出るには、沖縄や尖閣諸島を通過しなければならず、仮に台湾が中国の手中になれば、一気に防衛線を突破されることになる。これは米国及び米国の安全保障上の観点からも非常に重要なファクターである。そして、駆逐艦、上陸兵器、P3C等についても日本の離島をやすやすと侵略、支配できる程度の戦力を中国海軍は保有している。こうした戦力が非常に強力とされている。全て台湾の制圧を想定してのものだ。例えば、P3Cの保有数を比較すると日本は100、米国は200、中国10といったところ。そうした意味では、ある程度の潜水艦の侵入抑止になり得ているだろうが、中国は10000人の非常に強力な上陸部隊を保有している。日本は海兵部隊を保有しておらず、Anti-Access/Area Denial (A2/AD: 接近阻止・領域拒否)を強化している。中国の台湾攻略は、補給線を物理的に断つことと着上陸侵攻の2つである。海上封鎖は潜水艦で実施し、空上から爆撃することで制圧に向かうだろう。但し、これまでの経験上、空爆で制圧された事例は無い。そして、特殊部隊に拠るゲリラ攻撃、具体的には要人の暗殺等も想定される。但し、米国の核が一定の抑止になっていることも事実である。また、日米同盟も然りだ。今後、中国は軍事に留まらず、経済においても日米関係の分断を工作するだろう。そして、ASEAN諸国と日本等との関係分断も同様に工作するだろう。既に実行されている事例もある。また、現政権が日本国土の離島に自衛隊を配備したことは、中国にとって相当の侵略、侵入する上での抑止になっていることも申し添える。将来は、軍事上でも日本と台湾の早期の正式な交流実現（つまりは、両国の国交樹立）が不可欠であることを申し上げ、最後にしたい。御清聴に感謝申し上げます。

2. 鼎談 ～秋田と台湾が手を取り合って未来にすすむ道程～（川村副会長・梅原常務理事・柚原常務理事）

（柚原常務理事）東日本大震災以降、安倍政権が安定化していることを背景に自治体レベルでの相互交流や提携等が増えている。2004年度に1108人だった（台湾に渡航する）高校の修学旅行生が2016年度は40000人を超えた。当会の調査に拠れば、台湾からの義援金（報道では200億円とされているが、実数は253億円）に対する御礼を言いたいという理由が多い。これによって台湾を修学旅行先にしたいという学生が増えている。

（梅原常務理事）地震発生5時間後に李登輝元総統から直接激励のメッセージを頂いた。台南市と仙台市とで私の市長時代に交流協定を締結した。当時の頼清徳台南市長（現行政院長）が、仙台市に直接義援金を届けている。こうした台湾の気持ちを決して忘れてはいけない。我々は、台湾との交流を推し進め深めていかなければならない。仙台市では、行政の支援を受けずに民間レベルで台湾フェア等を催していることも紹介させて頂きたい。

（柚原常務理事）台湾は今年11月下旬、4年に一度の統一地方選挙を迎える。前回は2014年。9つのレベルの首長や議員等の選挙だ。政策における国民投票も実施される。国民投票では、例えばオリンピックでの台湾表記での出場の可否、LGBTの容認可否等がテーマだ。情勢は民進党がやや苦戦している。台南で国民党候補と競り合っている。高雄の陳菊前市長の後継候補が苦戦しているが、国民党候補の勝利は考えにくい。八田與一像の破壊や慰安婦像の設置等で国民党勢力が過激な行動を起こしている。これは、裏を返せば、当該勢力が縮小していることでこれまでとは別の方法で関心を引こうという焦りの証左。また、世論を見ても特に若い世代には、台湾人としてのアイデンティティが確立されてきている調査結果が得られている。つまりは、ルーツは外省人であるが、世代が進むに連れて本省人としての自覚、台湾アイデンティティが根本になりつつあるということだ。

（梅原常務理事）中国は、あらゆる手段で日本において中国に与する人間をつくっている。留学生を通じ、経済界に恩恵を与えている。秋田市と南寧市の交流は一つの問題と言えるかもしれない。

（柚原常務理事）秋田県のパスポート保有率は47都道府県の中で46位。保有率は9.2%である。交流促進には、国際定期便やチャーター便の就航が不可欠。知

事のトップセールスだけでは弱い。地方議員の直接の働きかけも継続していくことが重要である。

(梅原常務理事) 相互交流をする、それを促進する為には誘客だけでは成立しない。こちらから出掛けることも非常に大切である。よって、46位のパスポート保有率では……。相互交流、台湾側へのうまみを提供しなければならない。本日の御参集と御清聴に御礼を申し上げる。

進行の下手際で最後時間が足りなくなってしまったところもあったが、参加者は熱心にメモを取り、また質問もたくさん寄せられ、非常に内容の濃い充実した会となった。

最後に秋田県支部顧問で「都わすれ」を経営する佐藤京子様から閉会の挨拶があり、李登輝先生が秋田にご訪問された時のご様子や、台湾に李登輝先生を訪ねられた時のお話などあり和やかに閉会した。

(文責 佐藤典子)